

東海道馬入の渡し

江戸時代、幕府は大きな河川に橋をかけることを禁止しました。そのため、相模川(馬入川)や多摩川(六郷川)は「渡し船」、酒匂川は「徒歩渡し」などで渡っていました。

相模川には六十以上の渡し場がありました。大動脈である東海道は「馬入の渡し」と呼ばれ、幕府が管理し、周辺村々の負担によって成り立っていました。

当初、船は須賀村だけで用意していたようですが、元禄五年(一六九二年)に对岸の柳島村が加わりました。

また、渡船賃の徴収などを扱う「川会所かわしよ」の運営や船頭の確保は、馬入村など五六か村が務めました。川会所かわしよや、渡船額などの情報を掲示する「川高札こうさつ」は馬入村にありました。

渡し船には「小舟」と「馬船」がありました。小舟は人を乗せる船で定員二十人ほど、馬船は大型で馬が荷物を積んだまま横向きに乗ることができる船です。このほかに、将軍や大名用の「御召船おめしぶね」などが常時用意されていました。また、将軍の上洛など特別の大通行があった場合、幕府は「船橋」を架けさせました。



渡船場眺望図 (新編相模国風土記稿)

平成十六年(二〇〇四年)三月

平塚市